

「立守スピリッツ」が大人になった時に、ほんまに

勝手に生きてると思うわ

語り手 服部明（高校九期生 市役所職員）

聞き手 藤江 日葵

—じゃあ、軽く自己紹介を。

立命館守山には高校から入って。アメリカンフットボール部所属してました。で、アメフトも初めての挑戦になったんですけども、立守でいろんなことを学びながら楽しく部活もしてました。高校の時はアカデメイアコースから文系のコースに進んで、そこから法学フロンティアコースに進みました。他にも自分がやったことといえば、高三の時の体育祭で、赤団の団長をさせていただいたりもしましたし、最後の卒業論文、ちよつと頑張って力入れて文集の中に掲載してもらえようにはなりませんでした。高校生活は楽しいことやったりとか、辛いことやったりとか、いろんな青春を過ごした大事な思い出になってます。

それで、立命館大学の法学部を卒業して、今は高島市役所で働いています。入ってから五年目になるんですけども、五年間ずっと国スポ障スポの大会推進課ってところで、国スポの高島市で開催される競技の準備をしています。結構忙しくもなってきた、大会まであと八十五日になつて。

—近いですね。

もういいよ本番で、っていうテンションでなんとか頑張っているんですけども、立守で学んだいろんな知識とか経験とかも仕事にも活かし

ながら楽しくしてるところです。

*

現在につながるスポーツとの出会い

—ありがとうございます。じゃあ、最初に私がちよつと気になったことなんですけど。

うんうん。

—中学まではサッカーやられてたってことなんですけど、なぜアメリカンフットボールの部活に入られたんですか？

多分、なんかいろんなスポーツを経験するっていうのが、自分には性に合ってたからかなって。自分は親のおかげで、ありがたいことに子供の頃からいろんなスポーツをさせてもらってきまして、幼稚園の時は、水泳、空手で、小学校入ってからサッカー始めて、あと、空手から派生して、ヌンチャク。そう、ヌンチャクをやって。中学ではサッカー部に入って。サッカー歴が長かったから、高校っていう新しい環境になるときに、なんか違うことしたいなと思ったんですよ。サッカーでもゴールキーパーやって、空手もやって、体を張る感じのスポーツをよくしてた人間やったから。

その時に、立守のオープンキャンパスとか、学校の紹介とかを見ていると、なんか体を使って闘うスポーツがあるんやってことを知って、入学前からすごい興味を持って、それで入学して体験入部とかして、すごい面白くなってたんで入部もすぐ決めた感じです。なので完全に初心者からのスタートやったね。

—すごい。なにか、初心者で苦労したエピソードとかありますか？

やっぱり一番困ったのは、身体作りとルールの理解かな。体はこつい方やったけど元々（アメフトを）やってた人に比べたら筋肉も全然なかつ

たし。それから、やっぱりアメフトって独特なスポーツやから、サッカーとか空手でやってきた経験っていうのが、そのままだ活かせなくて。一からルールも覚え直さなアカンような感じになったし、用語も初めて勉強する言語を学んでるぐらいの、いきなりロシア語読み始めるぐらいの感覚で、めちゃくちゃ難しかった。

＊

新しい学びの「楽しさ」を知って

—iPad教育の一期生でしたよね。

うんうん。

—(新しいことで)戸惑ったこととかありますか？

まずあれやな、そのiPadがこれなんやけど。(実物のiPad Air(無印)を見せる)

—それ

これ、もはや化石を持ってるみたいやけど。

—動くんですね、まだ。

動く。ちゃんと動いてくれるの。iPadは、まず入学する以前は、そもそもその話がなくて、親曰く、入学説明会が始まった時に初めて知ったみたいで。ギガスクールじゃないけどiPad教育の、そのモデル校になりましたって話と、その関係で生徒一人につき一台用意してくださって急に言われて。でも、貸し出しもなく全員買い切りで、急な出費になって驚いたっていうのは言うてたけど。でも、個人的なこっちの意見としては、なんか学校で認められたiPadを正々堂々使えるっていうのが、勉強が嫌いな人間には嬉しくて。

ただ、やっぱりiPadを使って勉強をするっていう、その時代であるま考えられへんことをだいたい早い時期にして。iPadのアプリ使っ

て、暗記の勉強したりもしたし、アナログのノートの写真を撮って、わざわざロイロノート提出もしてたし。

—そこから始まったんですね。

そうそうそう、当時はなんかロイロノートの効率が悪くて、なんでこんなことするんやと思っただけど、ある意味データをクラウドにあげるとか今では当たり前のことが、当時はまだマイナーやったから、そこを先に高校で学べたのはなんか一期生の特権というか、すごいいいことをさせてもらったんやなっていうのは、今になっては思うからな。

なんか家にあつた立守関係のもの、とりあえずめっちゃ集めてきたんやけど。(プリントや資料集を出す)

—すごい。残ってるのがすごいです。

断捨離ができない家やから。ノートとかは捨ててるけど、でもなんか卒論のものとかが諸々残ってるわ。

—卒論ですか。全部。

多分全部卒論の資料やな。題材はブラックバイト。

—ブラックバイト。

—これの三番の、「立命館大学生とブラックバイト。」

—見ても大丈夫です？

どうぞ見てください。家を漁ってたら出てきたもんやし。でも、立守行くまではこんな文章を書ける気はせんかったの。正直。ほんまに。

—書く授業とかも全部一から受けて、作っていったってことですね。

うん。高三の時に卒論を書くにあたって、一こ上のアメフト部の先輩六人にインタビューをして。当時の与党の自民党、野党の民進党の政治事務所に行ってインタビューして、最後には労働基準監督署にインタビューをしに行ってやったから、結構なんかあちこち行って作ったな。

―(資料を指差しながら)ここですね。

そうそう。立守の話になるけども、自分は五教科が全部苦手やって、そのうちでも特に国語が嫌いやったんよ。当時から文章を読むのがあんまり得意じゃなくて。

たとえば本文に出てくる登場人物が「なんでこれをしたのでしょうか」って問題があったとして、選択肢いっぱいあると、全部答えに見えてしまつて。国語ってやつば受験勉強とかする中で、テクニクで解くもんつていう風に解釈して学んできたんやけど。

今、太田先生っている？

―いえ。

太田先生いらっしやらないやんな。(入学してから)高校の現代文もきつと面白くないよな、と思つてその人の授業に挑んだら、物語を解剖するみたいな感じの授業やつてん。筆者が何歳ぐらいの時に描いた作品で、この時にどういう環境下にいたのかとか。要は、どういう胸中でこの作品を書いたかつてところから作品に入つて。かつその物語で何を伝えたいのかつていうところまでをすごい細かく分解してくみたいな授業やつて。その文章が出てきた一小时前に戻つて解くみたいな、よくあるテクニクで答えを探すようなもんじゃなくて、現代文をパズルみたいに解いていくつていうのがめっちゃおもしろくつて。現代文の授業が好きになつてね。

現代文にとっぷり浸かつて楽しいと思つてたのに、それでもやつぱり書くつてのがずつと苦手で。もどかしい思いをして。二年生になつてから、グループ論文とか、小論文とかをたくさん書いてたり始めるんやけど、あんま上手書けへんくつて。で、悔しい思いをして。悔しいの嫌やから、必死に論文の書き方を学ぶというか練習して、授業もこなすだ

けじゃなく、しつかりやろうと思つてやつて。

で二年生の中間考査の、小論文のテストで参考回答みたいなやつに一回選んでもらったんよ。そこらへんから自信もついてきて、今まで国語がでんかつた自分がこんなの現代文を好きになつて得意科目になったから。ある意味、個人的には立守への恩返しみたいな気持ちもありつ、どうせやるんやつたら(卒論も)「有終の美」で締めたくなって思いもあつて、本気で卒論にも取り組もうつて思つたんです。

＊

―法学部、進学されたんですね。

うん法学部。

―それは、現代文から通じて法学に興味があつた感じですか？

うん、多分それもあるのかな。自分は大学に行く時何しようかなと思つたけど、決め手の一つは法学フロンティアの授業やつて、法学つて案外楽しいなつてなつたことかな。五教科と違うというか、国語でもなければ、算数でも、理科とかでも社会でもなく、法律つて新しいジャンルが結構面白くて。大学の学部つて言つても、例えば社会に出てから直接的に活かすのが難しいジャンルの学部も中にはあるっちゃあるやん。その中でも、法律つてどの分野でも絶対に絡むし、(大学に)四年間行つて学ぶんやつたら、ちゃんと力になるような学部の方がいいんじゃないかなと思つて。法学やつたら絶対社会人でどの分野に進んでも活かせる分野やし。

やつたら法学部つて最強なんちゃう？つてなつて。どうせなら、「生きた学びをしに行くぞ」つて行つた感じがな。

＊

―英語も苦手つておっしゃってましたよね？

うん、英語も。中学で置いてかれて。どっからかな、途中でほんまにわからなくなつて。基礎的などこしかわからなかったんやけど、それこそアメフト部に入つて助かったこともあつて。

アメフトって用語が全部英語なんよ。意味を調べんと分からんような単語ばかりで、けどアメフトを覚えていくと、勝手にちよつと英語の単語が覚えられるようになってきて。プラス、自分は人とコミュニケーション取るのが好きやつて、人見知りしないタイプっていう属性があつたんやけどな。英語は中学で、読み書きばかりしかやつてこんかつたけど、高校で立守に入ると、校内にたくさん留学生いるやん。

自分のクラスにも留学生が来て。英語は苦手で、英会話もあんまりやつたことなかったけど、とりあえずノリでコミュニケーションとつてみようと思つて行つたら、思いのほか簡単な言葉でも通じたのよ。それが自分の中で自信というか手応えになつて。読み書きはできひんけど、英会話は案外できるんやつてことがわかつて。そこから留学生とも仲良くなつたし、英語への恐怖心があんななくなつてな。

だから、立守のグローバリーな校風がなかったら、もしかしたら大学生や社会人なつても外国人をと避けたりとかしてた可能性が大いにあつたと思う。この経験のおかげで（大学で良い出来事が）ほんまにあつたの。

大学ではタッチフットボールのサークルにいたんやけど。タッチフットはアメフトを簡単にしたやつで、サッカーに対するフットサルみたいな感じかな。そこにアメリカ人の留学生が来て、（タッチフットボールのサークルに）興味あるつて言つてたんやけど、他のサークルメンバーは、誰も対応できひん中で、なんとなく自分から英語で話しかけてみたら、ちゃんと会話ができて。体験に行つてみたいつて言つてたから、う

ちのサークルに来てもらつたら、自分と英語でコミュニケーション取れる人間がいるし楽しいつて言つて、その子入部してくれて。

で、その子が最後帰国するまでずっと（タッチフットのサークルに）いて。帰国してから一回日本戻つてきた時も、プライベートで遊びに行つたりとかしたし。そんな経験もできるようになつたのは、立守のおかげやな。

＊

人の上に立つ経験から得た学び

―そう、体育祭。団長やられてたつて。

これも最初はほんとにやる予定なかったんです。一、二年生の時はちよつとやつてみたい気持ちはあつて。でも、三年生のクラスになると、他にムードメーカーの子がいて、その子の方が（団長に）似合つてると思つたから、自分はならんこうと思つてたんよ。今でも、クラスに係があるかわからへんけど。

―体育祭係。

あ、そうそう。その体育祭係みたいなところにいる人が団長、副団長になるつていう仕組みがあつて。そこに、ムードメーカーの子と、自分が体育祭係になつて。当時担任やつた太田先生との面談の中で、「なんで体育祭係なん？」つて言われて。「実は、一年生の時に体育祭の当時の団長さんに、お前、三年なつたら団長やれよつて」言われて。そのこともあつて、（団長を）やつてみたい気持ちもあつたから、立候補したけど。その、ムードメーカーの子がいるし、その子がやつた方がいいと思いますつて言うたら、「せつかくやるんやつたら、一番手じゃなくて、一番目指したらいいんちゃう団長やつたらいいんちゃう」つて言われてそこで、消えかけてた火がぼつとついて、団長に立候補することにし

て。そうすると、案の定ムードメーカーの子もまた団長に立候補してたから。

—じゃんけん、ですか。

そう。投票じゃなくて、じゃんけんで自分が勝って、(団長)になって。

—おめでとうございます。

でも、やっぱりみんなもムードメーカーくんの方がいいって思ったんやろうし。もう影でも直でも、「なんで服部の方が団長？」なんて言われたりとか、聞いたりはしたんやけど。みんなも内心では疑問でもあったんかもしれんけど。

でも、やっていく中で思ったのは、とにかく体育祭って三学年全部のリーダーになるから大変なことかな。今まで団体スポーツもいっぱいやってきたけど、多分今までの人生の中で一番大きい組織の長になったんよ。ほんと色々難しかったし。

—うーん、やっぱり(みんなに)求めたりするのがとても難しそう。

そう。難しくて、上手に伝えるのもできひんし。っていう中でも、なんだかんだでクラスメイトやったりがこう、言いたいことを伝達してくれたりとか。サポートしてくれて、わからんことや迷ったところを助けてくれたりとかして、どんどんチームがまとまっていった。それで、ぐちゃぐちゃな大きいものが、こう、ぐっと一つまとまってくるような、その感じを体育祭の団長しながら実感して。

最後はもうほんとチーム一丸となって。結果的には、友達とかにも、服部が団長やってくれてよかったわっていうのを言ってくれた人が何人もいて、それが嬉しかったかな。

—やっぱり、(今に)生きてますか？

生きてる。そこは生きてると思うな。

市役所の若者の、ユース部っていうものがあった。三十五歳以下の組合に所属してる人全員が対象の括りになってるんがあるんやけど、そのユース部の部長に入庁してから二年目になったんよ。

—二年目で。

そう。本来三年目とかで回ってくる人が多いんやけど。三年目の職員さんが誰もしがらんくって。で、一こ下の代の自分に部長の依頼が飛んできた中で、(自分が)やりますよっていう話になって。

でも、その時ってコロナ禍で。(大人数での)集まりはだめよってなってるんやけど。なんもできひんの嫌やん。で、上の人に「withコロナって形でどんどん規制緩和する方向に持っていけないですか」って相談して、いいよってなったから。

入庁二年目で、いろんな知らない職員さんとかいっぱいいる中でも、イベントの誘いのために自分が主体となって声かけに行って、職員さんの仲良い職員さんにも声をかけたりして。そういう繋ぎでうまくいって、活動をしてもらって、立守の体育祭の時みたいにしてたら、しばらく活動なかったユース部でも、コロナ禍やっただけど、三〇人とかのたくさんの人が何回もイベントに参加してくれたりとかして。

みんなマスクつけながら、バドミントン大会やったりとか。そんなんできたから、やっぱり大きい団体まとめるっていう経験を立守でしといたし、今ここでできたのかって思うな。

—なんか立守の経験が活きてる感じで、すごいですね。

思い返せば活きてるなっていう。多分きつと皆そうなると思うで、大きく変わった時に。

―部活とか、アメフトはやっぱり強豪ですし。

うん、そうやな。強豪のチームやな。うちは

―全国狙おうみたいな。(部活動で)印象的やったこととかありますか？

印象的やったのは、そもそも自分は中学とかでも全国を目指すっていうことをしたことがなかったし、高校入ってまず(アメフト部が)日本一を目標に掲げてるチームやったところがびっくりしたなど。県大会一位とかじゃなくて、日本一やっていうのが一つで。それから日本一を目指すチームであるからこそ、やっぱりレベルも高いし、やってる内容もしっかりしてて。本格的にスポーツをするっていうのがこういうことなんやなっていうところに、衝撃を受けたというか、結構印象的に記憶に残ってる。

そして日本一を阻む関学(関西学院)の存在があつてな。

―今でも「打倒関学」って(アメフト部の備置き場に)書いてありますよね。

そうそう、あれは俺らが在校時に書道部に書いてもらったやつなんやけど。それぐらい(関学は)強かったね。がつつりと日本一を目指してる中で、実は自分が二年生の時に関西の決勝まで行ったんだよ。

―すごい。

アメフトって関西と関東の一位同士がぶつかるっていうタイプの全国大会やから、関西の決勝って、要は全国ベスト四なんや。

―おお。

関西決勝に勝て次は、全国の決勝戦、それにも勝てば日本一っていう、(日本一まで)あと二勝って状態の中で。相手はあの関学。結果は十三対十四の一点差で負けてん、その時。土壇場でタッチダウンをとって、このまま延長線に突入するぞっていう安心感ある中でキックが外れ

てしまつて一気に絶望やったんよ。あの勇ましかった先輩方も泣いて。自分らもう一こ先に進めると思ったら、ここでスツと幕切れっていうのが、すごい悔しくて虚しくて。あの時の一試合の一瞬のことは今でもなんか景色覚えてるし、印象的やった部活の出来事かな。その悔しさばねにもう一年間やってきたけど、そのリベンジも果たせず、また悔しい思いはしたんやけど。

そういう光もあれば影もあるってところを、ちゃんと全国レベルで、ドラマチックなまでに三年間経験させてもらったのはすごい貴重やつたなつて思うな。

＊

―服部さんみたいに、立守での活かせるように頑張ります。

大丈夫。振り返ったら生きてるもんやから大丈夫。三年間の生活って何気に意識をしてへんくても体に染みついてて、それが自分になつてから。「立守スピリッツ」が大人になつた時に、ほんまに勝手に生きてると思うわ。色々経験して、どっかでそう感じるはずやで。

あと最後に一つ。恩師の太田先生が、卒業前の三年生全員に向けて最後に、メディアホールで言うてた印象的な言葉があつて。「立守では受験勉強をしないから、大学生になつた時に受験組に通用するか心配になると思う。でも、別の高校で他の子が受験対策をして知識という『ガソリン』を蓄えてきた三年間の時間を使って、立守生は社会で生き抜くための『エンジン』を鍛え続けてきたから、心配しなくても立守の皆は少しでもガソリン(知識)を注ぐだけで、誰よりも力強く走れる車にもうすでになつてますので、自信を持つて大学に進学してください。」そう背中を押してくれたんやけど、ほんとその通りやから、そういう意味でも立守はすごく良いところやし。



右：語り手 服部明さん
左：聞き手 藤江日葵

服部さんの「振り返ったら(高校生活)が活きてるもんやから大丈夫」という言葉が、これまで抱えていた漠然とした将来への不安を吹き飛ばすくらいに、印象的でした。その自信を纏った姿勢と力強い言葉に勇気もらい、自分の卒業後が楽しみになったと同時に、将来に生きるような体験を立守で沢山積み重ねていきたい、そう感じさせてもらえとても貴重な時間でした。

【感想】

—良いお言葉ありがとうございました。
あ、先生の。恩師の言葉やから(笑)。
—ありがとうございました。お時間、お忙しい中。
こちらこそ、ありがとうございます。